

モデル堆肥センター事例報告  
「いい土、いい顔、もっといきいき、もっと近くに」  
～香川豊南農協の取組事例～

香川県 農政水産部 畜産課 長松 始

## ■1. はじめに

平成11年に『農業・環境三法』が施行され、農業分野においても環境への配慮が不可欠なものとなりました。家畜排せつ物の適正な管理はもとより、堆肥による土づくりと化学肥料・農薬の低減を一体的に行う持続性の高い農業生産方式の普及定着化など、耕種と畜産の連携をベースとした有機性資源の循環的な利活用が求められています。

ここでは、「いい土、いい顔、もっといきいき、もっと近くに」をキャッチフレーズに、堆肥センターを核として家畜堆肥を野菜農家等に安定的に供給することにより、地域農業の活性化に結び付けている香川豊南農協(組合員数:3,692名)の事例を紹介したいと思います。

## ■2. 地域農業の概要

香川豊南農協は、県の西部に位置し、昭和41年に大野原町の4農協と豊浜町の1農協が合併して誕生しました。現在は合併(18年1月)により観音寺市の一部となっています。



管内の家畜飼養頭羽数・耕地面積は下表のとおりとなっていますが、瀬戸内海型の恵まれた気候条件を活かして、平坦部では水稻、野菜、畜産など、山間部では柑橘、落葉果樹(梨・柿・桃等)など多品目の農畜産物が生産されています。

耕種農家では、水稻とレタス、タマネギ、ナス等を組み合わせた複合経営が多く行われ、香川豊南農協の販売事業(16年度)では野菜が75%以上を占め重要な部門となっています。

畜産農家は、乳用牛6戸、肉用牛22戸、豚4戸、採卵鶏15戸と戸数が少ないこともあって販売事業における割合は1割を下回っています。しかし、有機性資源の素材である家畜排せつ物を堆肥センターに年間約6,000t供給するなど、経営の効率化を図り、厳しい経営環境の中で畜産物を生産しています。

これらの耕種と畜産農家の仲立ちとして機能しているのが香川豊南農協で、畜産農家の家畜排せつ物を堆肥センターで受け入れ、堆肥に調製後、耕種農家へ配送・散布を行い、家畜排せつ物

の適正な管理とともに野菜生産にとって欠かせない「土づくり」に寄与しています。

管内の家畜飼養頭羽数・耕地面積の概要 (17年度香川豊南農協資料)

家畜飼養頭羽数(頭、羽)					耕地面積(ha)			
乳用牛	肉用牛	豚	採卵鶏	合計	田	畑	樹園地	計
300	1,000	1,200	324,000	326,500	1,033	35	237	1,305

### ■3. 堆肥センター(パーク工場)設立の経緯と活動状況

- (1) 香川豊南農協では、合併当初から地域農業活性化のため、果樹及び野菜の生産団地の育成を目指し、「土づくり」を推進してきました。まず、最初に隣県の製紙会社から排出されるパーク(樹皮等)に着目し、これを堆肥に調し農地への施用を始めたようです。
- (2) 昭和47年には補助事業でパークを使った堆肥センターを設置し、本格的に堆肥を供給する体制が構築されました。相前後して「梨」のパイロット事業にも着手、梨園への堆肥施用が始まりました。  
 また、同地域は県下有数の酪農・肉用牛肥育のメッカであったことから、これらの排せつ物由来の堆肥も各農家ごとに活用されていましたが、昭和60年ごろ農協がこれに着目し、同センターでほぼ一手に管内畜産農家の家畜排せつ物を受入れて、堆肥に調製することとし、全国に先駆けていわゆる「耕畜連携」体制の構築を図りました。  
 その後、さらに補助事業等を活用し施設の拡充・整備が行われ、現在に至っています。
- (3) 現在、センターの敷地面積は8,000m<sup>2</sup>で、堆積場2,500m<sup>2</sup>、原材料置き場2,300m<sup>2</sup>のほか、育苗培土調整施設も敷地内に併設しています。堆肥の農用地施用と重なる繁忙期以外は常時雇用2名で施設を運営しています。年間の堆肥生産量は4,000tとなっています。
- (4) 堆肥化処理は堆積発酵方式で、家畜排せつ物をショベルローダーでもみ殻と混合し、ブロー付きの堆肥製造場(副資材置き場も含め7槽)に堆積、10日ごとに切り返しと移動を行い、約60日間で製品化しています。
- (5) 堆肥原材料としての家畜排せつ物は、畜種や水分状況等により、1車(2t)当たり600円～1,000円の範囲内で価格設定し、畜産農家から購入しています。一方、堆肥の農用地施用に当たっては、1車(2t)当たり6,000円の代金のほか、散布した場合には10a当たり3,000円を耕種農家より徴収しています。また、行政(町、現在は市)からの支援として、堆肥施用した場合には1t当たり500円が農家に助成されています。
- (6) この耕畜連携体制に支えられ、管内の堆肥利用面積はレタスで600ha、タマネギで100haなどとなっており、水稲作あとの施用を主体として多くの組合員(95%程度)に利用されています。「らりるれレタス」としてブランド化されている香川県産レタスのうち、およそ半分は本地域産であるなど、香川豊南の「梨」、「レタス」、「たまねぎ」、「青ねぎ」、「なす」、「きゅうり」、「なばな」、「みかん」、「びわ」など多品目の果樹・野菜が生産され、消費者から好評を得ています。
- (7) センターの経営収支は、収入が堆肥販売、散布料等で24,000千円、支出が人件費を含めて23,000千円余りとなっており、収益性は高くはないが、堆肥利用により有機性資源の効果的な利用が実践され、地域農業の維持・発展を支えています。



堆肥センター事務所



製品堆肥貯留場

#### ■4. おわりに

堆肥センターの設立から長期間にわたり、家畜堆肥が地域農業において上手に利活用され、循環型農業が展開されています。これは、地域内での堆肥の需給バランスがとれていたことのほか、香川豊南農協をはじめ、各農家や町、普及センター等関係機関の協力と連携の賜だと思われ

ます。  
最後に、今回の事例情報収集に当たって、御協力いただいた香川豊南農協の三好営農部次長に感謝申し上げます。